

科学技術と情報公開



巻頭言



畑田 耕一*

最近「情報の公開」がよく取沙汰される。特定の人しか知らない情報を広く公開することで社会における利用価値または効率を高めよう、あるいは、情報を特定の人のみが知っていることによる弊害をできるだけ少なくしようという主旨と思われる。ところが、科学技術の世界で情報公開が問題になるのは、決して薬害や大事故の時で、それも誰かが故意に情報をかくしたり曲げて伝えたりというような、あってはならないことが起こった時が多い。情報公開とは本来そんなものではない筈である。最近の科学技術の進歩は急速である。専門家の間には連日おびただしい量の情報が流れている。残念ながら、これが科学技術とは直接関係のない一般市民に対して、彼らが理解できるかたちで公開されることは極めて少ない。科学者、技術者がこんなものはどうせ市民にはわからないと思うのかも知れない。市民も先端の科学技術など難しくて面白くもない、その結果さえ享受できればよいと決め込んで、大事故でも起こらない限りたとえ情報が公開されていてもあまり興味を示さないのかも知れない。それでよいのだろうか？

エイズの問題にしても、最初からすべての情報が市民に公開されておれば結果はもう少し違って

いたのではなかろうか。科学技術に関するすべての情報を、一般市民がわかる形と方法で公開するのが、自分達の主たる任務の一つであるという自覚が専門家である科学者、技術者に求められる。どんなすぐれた科学技術も必ずプラス面とマイナス面をあわせ持っている。そのことをよく承知して、科学技術の真っ当な発展を支援するのは市民の努めの一つである。市民は「知る権利」を持っているが、同時に「知る義務」も負っているのである。市民が科学技術についての深い知識と鋭い鑑識眼を養う努力をしない社会に科学技術の発展はあり得ない。情報の公開が却って市民の誤解を生まないだろうかというような心配をしなくても済む社会にしたいものである。

科学技術に関する情報を一般市民にわかる形で公開するのは大変難しい作業で、科学者・技術者だけにまかせておけることではない。適切な通訳が必要である。この様な仕事に携わる科学ジャーナリストの養成に大学等の教育研究機関が真剣に取り組むべき時期である。一般解説書の出来栄なども著者や編集者のみならず出版社の編集担当者によって大きく変わることにお気付きの方も多いと思う。

科学者・技術者はその道のエリートである。エリートは選ばれた人間としての責務を市民に対して果たさねばならない。一方、市民は選ばれたエリートが行っている事の成り行きを、正しく見守る必要がある。そのためには、市民にわかる形で

* Koichi HATADA

1934年12月15日生

昭和32年大阪大学理学部化学科卒業

現在、大阪大学大学院基礎工学研究科、化学系専攻
合成化学分野、教授、大阪大学副学長、大阪大学共
通教育機構長、理学博士、高分子化学

TEL 06-850-6230

の情報公開と、その情報を上手に生かし、科学技術の進展を支援する努力をいとわぬ市民の存在とが必要なのである。序でながら、どんなマスメディアにも誤報は起こる。編集された記事はことの実を100%伝えていないこともある。これを見抜く能力を養うこともまた市民の義務のひとつであろう。

現在、自然科学と技術の成果は広く深く市民の日常生活に浸透している。市民は、科学技術を、その成果を通して理解しようとしているとも言える。しかし、科学技術は便利なものや環境づくりだけを目指しているわけではない。新しい科学、新しい技術が新しい考え方を生み、

これが社会を進めてゆくのである。科学技術の本質、その人間社会とのかかわり合い、あるいは科学者、技術者の倫理観、職業観について、科学者・技術者を含む市民が一体となって情報交換を行い、夢を語り合うことが、科学技術の発展につながることは間違いない。人文科学、社会科学、自然科学、環境科学が互いに融合することによって人々の生活が向上してゆく、そんな社会をつくり上げられればと思う。

本稿は高分子学会会誌「高分子」1997年1月号に掲載された原稿を、許可を得て加筆改訂したものである。

